

前回のまとめ

労働がもともとどのような意味を持っていたのかという話の続きで第2回目です。前回は、簡単にまとめますと次のような話になったと思います。

この社会が依然として人間活動の中心を労働が占めているような社会であるということ。資本主義といってもいいし、近代社会といってもいいし、市場社会といってもいい。したがって、労働が人間活動の中心を占めているような社会での労働の意味論ということになります。にもかかわらず、最近ではこの社会での労働の意味が見失われている。関連した例がたくさん起こっている。これは単に、ワーキングプアのように生活するに足りない賃金しか得られないという貧困の問題だけではなくて、場合によっては、まともに働くことができないこと自体が苦痛になっている。サラリーの多寡もありますけれども、そもそも働くことに意味が失われている。こういう事態は、多分バブル崩壊期の日本のブルジョワ的なビヘビアのモラルの欠如が関連してきたに違いないと思う。こここのところの不況と物価高という世界的な現象は、21世紀になってから顕在化しましたけれども、多分一時的な現象ではなく、世界的な意味で経済社会体制の変換に直面しているのでしょうか。現在の日本の労働問題はバブルの後遺症という一時的なものではない可能性が大きいということです。この事態に対応するために、ベーシックに労働の問題にアプローチしておくことが意味を持つてくると思ってこの勉強会をはじめたわけですね。

それから、労働にはどういう意味が古来付与されてきたかということの最初の意味論として、教材にあげた大庭さんと今村さんの本を取り上げた。大場さんは労働における相互承認あるいは役割遂行に労働の意味をみる。今村さんの言葉で言うと、対他承認欲望、つまり他人に承認してもらいたい、それがかなえられれば労働は喜びになるし、かなえられないと労働が苦痛になる。両者いずれも労働の意味は、職人が一人で働いているのとは違って、働くことそのものにあるのではないといっている。労働は他人と一緒に社会関係をつくって働くということが本質的な特徴であって、労働の意味とか喜びとか苦痛も、協業の中にある。社会における労働の編成の形に労働の意味を見出さねばならないということです。

資本主義的な生産では、理想的に考えますと労働力までが商品化され、商品として労働力が売買されます。ですから、もともと市場社会では労働がどのように編成されるか、つまり労働市場の組織化の形を具体的に指定する根拠がないわけですね。そうかといって、じゃあ労働力が商品として人間生身の体から離れて普通の製品と同じように扱われるかと

いうと、それにはどうしても無理がある。ですから、労働の編成に関して資本主義社会は何の指定もできないんだけれども、現実的には何らかの労働市場の組織形態を取らない社会というのはどこにもない。一番見やすいのは労働組合という形で労働力商品の取引に関して労働者が組織的に干渉する。市場社会の原理に反するようなことが資本主義のごく初期から行われている。そうすると、労働の意味が見失われているということは、従来の労働の編成のされ方、協業の仕方が全世界的な意味で解体しているという状況の中で受け止めるべきだと思います。

それから、まとめの 4 番目として、こういう情況に直面したときに、多くの論者が労働の喜びというのは労働の場にはないのであって、労働の外で初めて、喜びが確保できると主張しています。つまり労働力の商品化の外部に労働の意味を見出すべきだということですね。この前紹介したのは、1 日 3 時間働いてあとは自分の作品に関する品評会を職場でやってすごすというような未開社会の例です。現代社会でも、どんどん労働時間が短くなり余暇時間が増えていく。この余暇の過ごし方のうちに生きる喜びを見出していくべきだと、今村さんがいっています。いまからたった 10 年前の著作ですけれども、まともに働くこともできない今日から見れば、ちょっと白けてしまう予測ですね。大庭さんの場合も、これまで労働力商品化の外部に置かれていた家事労働や生態環境の保全の仕事に、新しい労働の意味の可能性を見出していくように勧めています。現代の多くの労働論はこうなっているということです。

まとめていうと、これからも問題にしていきたいわけですが、労働の外部ではなくて、先ほど言った労働の編成の仕方に焦点を当て、問題があれば労働市場の仕組みを改革することが大切だということです。

労働とその自己疎外

今回は、アダム・スミスの時代から 100 年後の 19 世紀になりますけれども、労働の意味がどのように考えられていたかということ、マルクスに即して簡単に見てみようということです。年配の方は学生の時に読んだと思いますが、若いひとは知らないでしょうから、ざっと見ていくことにします。まず最初に、労働の意味論の 2 として、マルクスの若いころの草稿、経済学哲学草稿です。本来の労働とその疎外という大変有名な論理を思い出したいということです。

労働の自己疎外論は市場社会における労働の意味論のひとつの原点になっているということで、押さえておく十分な価値がある。加えてもう一つ、今や疎外論というのは労働の疎外に限らず、苦痛な現実を疎外された状態ととらえて告発するというふうにして、いろんな社会的現象に関して使われています。疎外という言葉を使うときに、もともとどういう脈絡でこれが使われていたのかを知っておいたほうがいいという趣旨です。昔は、労働

の疎外論は実は労働の問題というより、社会主義とか革命の問題に関心があって勉強しました。今日はそっちの話は抜きにしまして、労働の意味論ということで取り上げます。

マルクスの場合、労働論は二本立てになっています。一つが本源的労働とか本来の労働とか、疎外されていない労働といわれます。労働はそもそもどういう活動であり、どういう意味を持っているか。加えて、それが現実の資本主義社会・市場社会の労働としてどのような歪みをこうむっているか、こちらが疎外された労働です。まず最初の本来の労働のあり方というマルクスの主張。ここに労働の意義づけの典型的な形が表現されているのを見しておくことにします。

資料は、労働の自己疎外論からの抜粋です。独特の言い回しがありますから、読んで見ますね。まず最初の 3 パラグラフです。これが本来の労働はどういうものかについての、マルクスの走り書きです。

それゆえ人間は、まさに対象的世界の加工において、はじめて現実的に一つの類的存在として確認されることになる。この生産が人間の制作活動的な類生活なのである。この生産を通じて自然は、人間の制作物および人間の現実性として現われる。それゆえ労働の対象は、人間の類生活の対象化である。(カール・マルクス『経済学・哲学草稿』 p.97)

まず、「それゆえ人間は、まさに対象的世界の加工において、はじめて現実的に一つの類的存在として確認されることになる。」この論理は意外にしぶとくて、いまもいろんな議論に生きています。大庭健の「いま、働くということ」の前半部分は、基本的にはこれの解説になっているくらいです。私自身はこのロジックに賛成ではないですけども、世間の論説のあれこれを今読むときにも、この疎外論の論理がベースになっていることが多いのに気づくと思います。そういう意味でもちょっとテキストにあたっておきたいと思います。

最初の引用文章で、「対象的世界の加工において」というのは、労働は自然に働きかけること、対象的世界とは自然のことです。自然世界を加工することにおいて、人間ははじめて現実的にひとつの類的存在になる。ここでは類的存在というのがキーになっているんですけども、この言葉は後回しにします。「この生産が人間の制作活動的な類生活なのである。」あとで言いますが、この類というのは人類の類です。動物であるとか植物であるとかから区別された人間の、いわば生物学的な分類が人類です。だから人間が働くということと、蜘蛛や蜂が働くこととどう違うかということがバックにあるんですね。

「この生産を通じて自然は、人間の制作物および人間の現実性として現われる。」これはつまり、自然に対して働きかけるとは、自然というものがもはや訳のわからない闇の向こうにある脅威ではなく、人間化される、自然が人間化されるということの意味する。極端に言うと、自然存在は人間の制作物であるか、原理的に人間の制作物になりうる存在だ

という指摘です。原始人が持っていた自然に対する恐怖は克服されている。自然の人間化と申すけれども、これが制作物及び人間の現実性として現われる。それゆえ労働の対象は、人間の社会活動の対象化である。労働というのは自然の人間化のことを言っているのだと、ここを読んでおいてください。

対象的世界の実践的な産出、非有機的自然の加工は、人間が意識している類的存在であることの確証である。すなわち人間が、類にたいして、自分自身の本質にたいするようふるまい、あるいは自己にたいして、類的存在にたいするようふるまう存在であることの確証である。(同書 p.96)

次が、自然の認識と技術を可能にする。労働を通じて自然を人間が利用することによって自然の法則性がわかり、法則を利用して技術を作って現在の科学技術文明を切り開いていく。労働のそういう能力に注目していったものですね。「対象的世界の実践的な産出、非有機的自然の加工」という文章で、非有機的自然というのは、外界にある物的な自然という意味ですね。その「加工は、人間が意識している類的存在であることの確証である。すなわち人間が、類にたいして、自分自身の本質にたいするようふるまい、あるいは自己にたいして、類的存在にたいするようふるまう存在であることの確証である。」

また類が出てきていますね。ここで類的存在であるということは、大庭さんが「相互承認」に労働の意味がある。それから、今村さんが他人に承認される事に労働の意義があると先ほど強調しておりましたけれども、これと内容的には同じことなんです。類的存在という事は、人間は労働する事によって自分は一人ではないんだということを確認する。それは労働を通じて始めて隣にいる人間と協力するからです。単に家族や狭い共同体ではなくて、市場社会における商品交換のように匿名の関係の中で、直接的に対面していなくても社会的な対他存在であるという事を労働を通じて認識する、意識する。そこが動物とちがう人間の類的存在の、類的本質だといっています。

このように、すでにマルクスの時代に、労働の本質は、対他存在としての人間の実現と自覚にあるんだということが強調されました。人間の類的本質に労働の本質があるというのが、マルクスにいう「疎外されない労働」の本来の姿ということになりますね。じゃあ類的存在を具体的歴史的にいうと、どのような労働の社会的編成、労働市場の組織化として行われるのか。このようなことはこのレベルでは議論しないわけなんですね。つまり歴史が入ってない。歴史的な現実では類的存在と申すって搾取されるだけではないかというような対他関係の現実が捨象されている。他人に承認されることに労働の喜びがあり、他人に承認されないことによって労働の悲しみがあるというようなことが、どういう歴史的な状況に置かれているかをとりあえずは問わないということです。

ついでですが、いまのマルクスの言葉の中には、自然を人間化して技術を作り出してい

くということが、あんまり露には出てなかったですけども、参考の為にもう一つ、日本の戦後のマルクス主義者がいうとどうなるかというのを、黒田寛一さんという人の文書で見てください。こっちの方が露骨です。

人間は、自然を自己の目的に役立たしめ、これを支配するのです。自然の暴力のまえに屈することなく、自然を逆に支配していくのです。試行錯誤の生産活動をとおして人間は自然の客観的な法則性をだんだん認識し、これを正しく適用する、と同時にそれによってまた、自分自身を変化させ、あたらしい素質をかくとくしてゆくのです。こうして、人間意識が発達し、自己意識が生まれ、予定計画的な、まえもって知られた一定の目標にむけられた、すなわち合目的（ママ）な、生産的労働へ高められたのです。これが技術的实践にほかなりません。（黒田寛一『社会観の探求』 p.56）

「人間は、自然を自己の目的に役立たしめ、これを支配するのです。自然の暴力のまえに屈することなく、自然を逆に支配していくのです。」これが自然の人間化です。「試行錯誤の生産活動をとおして人間は自然の客観的な法則性をだんだん認識し、これを正しく適用する、と同時にそれによってまた、自分自身を変化させ、あたらしい素質をかくとくしてゆくのです。こうして、人間意識が発達し、自己意識が生まれ、予定計画的な、まえもって知られた一定の目標にむけられた、すなわち合目的な、生産的労働へ高められたのです。これが技術的实践にほかなりません。」

以上は、日本の戦後のマルクス主義の一つの特徴にもなっています。つまり、「類的存在」にウエイトがなくて、このように労働がいかに自然を人間化して、そこから技術を作り出していくという労働のプロダクティブな性質に重きを置くとらえ方です。これはこれで特徴的な労働の意味論です。

別に日本の戦後のマルクス主義だけではなくて、マルクス主義のオーソドックスな理解の仕方とはこういうふうになっています。そこから透けてでることは、自然を搾取することによって人間化していく、利用する、そういう意味で労働というのは非常にプロダクティブなものなんだと見るのです。だから、自然に対してプロダクティブな活動することに労働の意味がある。これはマルクス主義ではきわめてポピュラーな考え方になります。これにたいして、労働において自分を「類的存在として確認する」という点に、現代的な哲学者はウエイトを置いていると見ていただければいいと思います。

だから、本来労働にはどういう意味があるか。マルクスに即して言うと、三つですね。自然の人間化、それから技術を作っていくということ、人間の類的本質の実現ということですね。ところが、歴史的な労働の状況、現実の労働では本来の労働が疎外された労働の形をとっている。これが労働の自己疎外論です。先ほどの労働の本質三つに対応して、三つの労働の自己疎外が指摘されます。

「労働対象の疎外」

労働の実現は労働の対象化である。[しかし] 国民経済的状态のなかでは、労働のこの実現が労働者の現実性剥奪として現われ、対象化が対象の喪失および対象への隷属として、[すなわち対象の] 獲得が疎外として、外化として現われる。(カール・マルクス『経済学・哲学草稿』 p.87)

まず、労働対象、製品ですね。製品が自分の物じゃなくなっちゃう、という労働対象の疎外、商品化という事です。「労働の実現は労働の対象化である。しかし国民経済的状态の中では」、市場社会ではという事です。「労働のこの実現が労働者の現実性剥奪として現われ、対象化が対象の喪失および対象への隷属として」、これも言葉が難しいですけども、労働というのは本来プロダクティブですから自然から有用なものを作り出す活動に本質があったんだけど、市場社会では、労働は自然を対象化するけれども、それが対象化を剥奪されてしまう。自分が作ったものがどっかもってかれてしまう。そればかりではなくて、自分が作ったものにかえて自分が隷属してしまう。たとえば商品としてこれが売り買いされた時には、自分の汗水流してつくった物っていう親しい感じはもう製品にはもてないばかりか、その製品が欲望をかきたてることによって逆に商品に支配されてしまう。「すなわち対象の獲得が疎外として、外化として現われる」と言っているわけですね。

「労働という活動の疎外」

労働が労働者にとって外的であること、すなわち、労働が労働者の本質に属していないこと、そのため彼は自分の労働において肯定されないでかえて否定され、幸福と感ぜずにかえて不幸と感じ、自由な肉体的および精神的なエネルギーがまったく発展させられずに、かえて彼の肉体は消耗し、彼の精神は頹廢化する、ということにある。だから労働者は、労働の外部ではじめて自己のもとにあると感じ、そして労働のなかでは自己の外にあると感ずる。(同書 pp.91-92)

これも現実的には非常に親しいことです。労働という活動そのものが疎外されているという事で、「労働が労働者にとって外的であること、すなわち、労働が労働者の本質に属していないこと、そのため彼は自分の労働において肯定されないでかえて否定され、幸福と感ぜずにかえて不幸と感じ、自由な肉体的および精神的なエネルギーがまったく発展させられずに、かえて彼の肉体は消耗し、彼の精神は頹廢化する、ということにある。だから労働者は、労働の外部ではじめて自己のもとにあると感じ、そして労働のなかでは自己の外にあると感ずる。」これも今ではきわめて普通に指摘されることで、労働の内部

は苦痛であって、労働は資本主義社会ではそもそも苦痛以外の何ものでもなくて、幸せはその外部にある。だから労働の外部に幸せを求めるといふ現在のある種の論者の言い方になります。

「人間の本質の疎外」

〔疎外された労働〕は、人間の類的存在を、すなわち自然をも人間の精神的な類的能力をも、彼にとって疎遠な本質とし、彼の個人的生存の手段としてしまう。疎外された労働は、人間から彼自身の身体を、同様に彼の外にある自然を、また彼の精神的本質を、要するに彼の人間の本質を疎外する。(同書 p.98)

それから、人間の類的本質に関連します。人間の本質の疎外という事で、「〔疎外された労働〕は、人間の類的存在を、すなわち自然をも人間の精神的な類的能力をも」、「彼にとって疎遠な本質とし、彼の個人的生存の手段としてしまう。疎外された労働は、人間から彼自身の身体を、同様に彼の外にある自然を、また彼の精神的本質を、要するに彼の人間の本質を疎外する。」ということで、本来の私と他者との関係が労働の中でギクシャクした、あるいは搾取・被搾取の関係にゆがめられてしまっている。そうなる活動自体が対他関係において喜びをもたらす、自分の社会性を獲得する、あるいは公共的な善の実現に結びつかない。以上のように、労働の本質とその現実の疎外された形、この二つのことがペアになっているのが、1844年段階のマルクスの労働論なわけですね。

これだけみると、労働そのものに意義があると言ってるようにも見えるし、実際の労働の事を考えて労働自身に意味はないんだと言ってるようにも、どっちにもとれます。現在でも二通りのロジックが便利に使われています。けれども、この当時のマルクスのウエイトの置き方は圧倒的に前者にありました。つまり疎外されてない労働が人間の類的な本質を実現する、そういう労働のプロダクティブな性格ということに中心をおいて、マルクスはあらゆることを考えた。

では、この二つの関係ですね。労働のもともとの姿と疎外された労働の関係を、マルクスはどうとらえているか。レジュメに書いてありますように、化体と主体というふうはこの関係を考えてみます。疎外という考え方は、わかりやすくいうとこういうことなんです。主体と化体というのは、もともとはキリスト教起源です。キリストはもう死んでいるわけですから、クリスチャンがカトリックの教会に行くと、キリストの肉体の代わりとしてパンを食べ、処刑されたキリストの血の代わりとしてぶどう酒を飲みます。キリストの化体、仮の姿、化けた姿です。それに対して、もともとのキリストが主体です。主体と化体の対比で考えられてきたということになります。

ある人の古臭い比喻をつかいますと、主体というのが狸だとします。ぶんぶく茶釜という話がありますでしょ。狸が化けてぶんぶく茶釜になって余興を演じる。このぶんぶく茶

釜が化体である。要するに化体としてのぶんぶく茶釜がもとに戻って主体になると狸だと、こういうわけですね。化体というのは仮の姿であり、本来は別の本質をもっているのだという風に考えるのです。現在でも主体性とか主体的とか言いますが、主体という言葉には、本来ならこうあるはずであるというニュアンスが伴います。

そうしますとマルクスの若いころの考え方としては、類的本質としての労働活動は明らかに化体にたいする主体であったわけですね。疎外されない労働です。そして労働の化体が疎外された歴史的社会的労働である。こういう対比をしますと、歴史的あるいは外的な条件を取り去ってしまうと、狸としての主体、もともとの姿を回復することができる。そういうペアの考え方になります。資本主義社会あるいは私有財産制のもとでの労働は喜びがない状態なんだけれども、その社会的、歴史的条件をなくすことによって、労働が元の意味を回復することが出来る。簡単にいうとこれが「疎外革命論」と呼ばれるものです。

労働だけじゃなんですね。あらゆる現世の苦しみについて、自己疎外論の論理を立てることが出来るわけです。本来の自分とはこういうもんじゃなかった。現実を化体と考えて、それに対する主体を取り戻したい。これが「自己実現」です。この論理は別に悪い事ではないですよ。人間が夢や理想を持つときの考え方の構造です。その原型がマルクスの労働の自己疎外論にあると思ってください。

実は結論的に言いますと、このころのマルクスの考え、とりわけ疎外されない労働の主体という考え方は、きわめて近代的な考え方です。あえていえば 19 世紀の、きわめてブルジョア的なイデオロギーの核心ですね。共産主義者マルクスにとっては、これは逆説的な言い方になります。けれども、やはり 18 世紀、19 世紀にブルジョア的に労働が組織された時、その大本にあった主体とは全世界を人間化し、科学技術を作り出して自然から富を絞り取るという極めてプロダクティブな労働を理念として持っていました。このころのマルクスには、それが非常にはっきりした形で出てきています。マルクスについて世間が思っているイメージに反しますが、私はそうとらえています。眉に唾つけて聞いてもらって構いません。ここでは、突飛になりますが、次の指摘を読んでおきます。

唯物論の本質は、すべてのものがただ物質にすぎないとする主張のうちに存するのではなく、むしろ、それにしたがえばすべての存在者は労働の素材として現れてくるという一つの形而上学的規定のうちに、存するのである。労働の近代的—形而上学的な本質は、ヘーゲルの『精神の現象学』のうちで、次のような過程として、先駆的に思索されている。すなわち、無制約的な組み立てがそれ自身を整序してゆく過程、つまり、主観性として経験される人間のなす現実的なものの対象化がそれ自身を整序していく過程が、それである。唯物論の本質は、技術の本質のうちに秘め隠されているのである。この技術については、たしかに多くのことが書かれているが、しかしごくわずかのことしか思索されていない。技術は、その本質において、忘却のうちに眠る存在の真理の、存在の歴史に即した一つの

運命である。」（ハイデッガー『ヒューマニズムについて』 p.81）

これはハイデッガーという哲学者の指摘です。最初の部分だけを読みますが、「唯物論の本質」つまり、マルクス主義の本質は、「すべてのものがただ物質にすぎないとする主張のうちに存するのではなく、むしろ、それにしたがえばすべての存在者は労働の素材として現れてくるという一つの形而上学的規定のうちに、存するのである。」そして最後の方になりますけれども、「唯物論の本質は、技術の本質のうちに秘め隠されているのである。この技術については、たしかに多くのことが書かれているが、しかしごくわずかのことしか思索されていない。技術は、その本質において、忘却のうちに眠る存在の真理の、存在の歴史に即した一つの運命である。」

わかりにくいですがけれども、要するに最初の二行で何が言いたいかということ、若いマルクスの労働観に秘められていた考え方は、世の中に存在するものは全部労働の対象だという確信だということです。いいかえれば、労働の対象に出来ないようなものはこの世の中に存在していないんだという、世界に対するイメージです。前近代の人にとってはそんなこと絶対にないわけですよ。世間の外に闇が広がっているわけですから。だからそういう闇が原理的に克服されていて、地球上にはもう原理的にわからないもの、科学技術の対象にできないもの、人間が加工できないようなものはもう存在しない。ところがハイデッガーにいわせれば、これは確かなことでもなんでもない、形而上学という一種の壮大な仮説である。労働の意義についての近代のイデオロギーなんだというのが、ハイデッガーの言いたかったことになります。それが証拠に、このような自然観と労働のイデオロギーから近代の科学技術が発生している。そして技術が現在の科学技術文明を作り出したことを批判しています。別な主題になりますけれども、技術文明の批判がマルクスの労働論にたいする批判に結びついてきます。

結論的に単純化して言えば、若いマルクスの思い描いた労働のあるべき姿というのは、プロダクティブであると同時に、人間がそのうちで同胞兄弟関係を確認できるような本質的な活動であり、現実の疎外された労働からその本質を取り戻さなければならない。これが労働の意味論として、二番目に申し上げたかったことです。労働の自己疎外論のロジックは、これからも繰り返し参照していくことになります。

市場社会の労働

次に、労働の意味論の三番目です。ここは皆さんよく知っていることですから、簡単にすませます。労働者階級の形成、資本論、晩年のマルクスの労働論ですね。これもなかなか逆説的なことで、労働自己疎外論によると、現実の資本主義的な労働はまさしく疎外された労働で、そこに労働の意味や喜びを見いだすなど、そもそもありえないわけです。け

れども、疎外された労働とはニュアンスの違った論理を、資本論ではマルクスが言ってるように思えます。

といっても、資本論というのは経済学ですので、階級とか階級の形成とかいうことに関してほとんど片言双句、お筆先的なことでしか言ってないんです。労働力まで商品化されている世界ですから、労働者であれ他の誰であ「階級」などそもそも考えることができないという経済学者もいます（宇野弘蔵）。けれども、資本論で唯一、労働者階級が出てくるのが、標準労働日をめぐる闘争ということです。これはこういうことなんです。この時代になりますと、つまり 19 世紀の後半、マルクスはドイツからイギリスに移ってイギリスで生活しておりますが、そこではじめて、現在にいたる資本主義的な労働のあり方が大工場制生産という編成を取って出現し始めます。マルクスはこれを観察する。19 世紀の産業革命真っ盛り頃は、ブルジョアの方もでたらめですから、労働者を雇うと疲労困憊するまで働かせたわけですね。労働環境のみならず、労働時間がべらぼうに延長する。それがだんだん労働時間の短縮というスローガンの下に労働者の権利が認められるようになっていく。国家的なレベルでは工場法の制定という形で、1820 年代から度重なる改訂を経て、労働時間が短縮されるという傾向が、マルクスの時代に起こってくるわけです。

これに関連して、実は近代的大工場という形をとった労働の編成それ自体が、労働者に階級としての自覚を持たせるのだとマルクスは考えました。階級としての闘争、権利要求、つまり労働者階級の階級闘争に意識的に取り組むことを通じて、大工場制をまさに前提にしたうえで労働時間の短縮が図られた。そうすると大工場制に編成された、つまり資本主義に編成された労働のあり方が、もう前提になっておりまして、これが仮の姿だとか、これをとっぴらっつてしまい疎外されない労働を回復しろというような議論の立て方ではないわけですね。むしろ近代の大工場制が、それ自体の論理によって編成する一つの階級のあり方、それをベースにして権利要求を実現するという論点に移っていくわけです。バックにあるもう一つの事実は、ここで初めてですね、働くときのリズムとか規律というのが違ってきます。たとえば農業労働では雨が降れば労働を休みます。自然とともに自然のリズムに合わせて労働していた従来の労働から、大工場制に編成された労働に変わる。後者は特有の規律をもって編成されて、一日の日程が時間単位できちつきまわっていて、そこから 5 分たりとも逸脱できない。今じゃあたりまえのことですけども、自然と共に農業をやっていた労働者たちをこの規律にあてはめることは物凄く大変なことであったわけですね。

労働時間の編成は 19 世紀の初期のころのこと、ちょうどそれに対応した形で労働日の短縮が実現していく。労働日や労働時間が決まってない労働から、時計に合わせて働くというようなことが起こってくる。マルクスが強調しているのは、大工場制を前提とした上で、その労働のリズムにあわせる過程で労働の規律がつけられる。そうやって効率的に労働が搾取されるには違いないのですが、しかしその反面として労働者が団結できる規律も生ま

れる。バラバラじゃ困るわけで、ある一つの規律をもって階級としての類的存在を自覚していけないと、労働者の横の繋がりが無いわけです。これを資本制自体が作り出していくというふうに考えたわけです。労働者の自己陶冶という言葉が使われています。陶冶というのは自身を教育して高めていくということです。そういう見方の中で、標準労働日をめぐる闘争の中で、資本論で唯一階級闘争に言及される、そういうことです。

そうしますと、ここから、労働者福祉と労働者政権の展望ということになります。実際にイギリスで言いますと工場立法が改善されていくと共に、労働環境に対する様々な法制が整備されていくようになります。並行して労働者の福祉に関する体制もずっと整備されていくようになるというのが、19世紀の半ばから後半にかけて進んでいくわけです。そして、標準労働日をめぐる闘争から始めて労働者が労働組合を結成する。労働組合という形で労働力の編成を労働者のイニシアチブで行う。先ほど言いましたように、商品労働という市場社会では、特有の労働編成の原理はないわけですが、大工場制の規律を通してブルジョア側が労働を編成する。同時に、労働者のほうでは労働組合という形で対応するようになってくるわけですね。労働者福祉の編成も、イギリスでは19世紀の後半に形をとってきます。

すでにマルクスが、マルクス自身というよりは友達のエングルスが1890年代まで生きておりましたが、その晩年になりますと、労働者階級の政権までも展望するようになります。イギリスでは労働党。典型的にはドイツですね。エングスルの指導下にドイツの労働組合とドイツの社会民主党が形成されて、これが破竹の勢いで進展を見せるのが、19世紀の末ということになります。ドイツ社会民主党と社会民主党の労働組合がペアになって拡大していきました。そうすると、平和的かつ合法的に労働者が政権を獲得するのも間近である。そういう展望をエングルス自身書いています。以上のことはドイツだけではなくて、西ヨーロッパ全体で起こります。労働者福祉と労働組合とは由来は違うんですけども、思いもかけない労働の編成が発明されます。その将来展望として労働者政権の樹立が展望されたということです。

イギリスの場合には、労働党政権ができるのは第二次大戦直後ですが、19世紀後半に労働党が自由党から独立します。社会民主党による単独あるいは連立の労働者政権は、ひところはEU加盟国の3分の2ぐらいを統治するまでになります。だから先ほどいったような、資本論のマルクスの見方、展望はまさしくヨーロッパで実現される。そういう流れです。

もちろんこれは社会民主主義じゃないかという反発はあります。反発はどうして出てきたかということ、19世紀の末にレーニンのロシア革命がありこれがマルクス主義のもう一つの流れを作りました。この流れの中で出てくる事です。両者は系譜が違うんですね。ここではその話は置いて、オーソドックスな流れを社会民主主義と考えます。このことを労働の意味の源メージの三番面として言うと、もともと労働が、社会的な対他存在として

の意味であったとするならば、その社会的な対他存在として具体的なあり方を労働組合、労働者階級、労働者の政権、あるいは労働者福祉として、産業労働の只中で展望していく。こういうところに、もう一つの労働の意味がおかれてきたとっていいんじゃないでしょうか。この流れの中に、先ほどもちょっと出てきましたけれども、福祉国家の形成があるわけで、これは「自由」というテーマで後にイギリスを中心に触れるつもりでいます。

以上、労働の意味論の源泉として三つ、勉強会の一回、二回にわけて考えてきました。結論として私の考えは、労働の意味を「本来の労働」や、「疎外された労働」の外部に求めるのではなく、労働の現在の編成の仕組みあるいはその解体という現実の中で、これを再編成する方向で考えるべきだということになります。再編成の方向が労働組合と階級闘争になるべきかどうか、これは別の問題です。実は労働の意味論としてもう一つ、触れられなかったことが残ります。宗教的な労働論のことで、宗教改革とピューリタンの労働倫理という話があります。働くことには宗教的な意味が付与されており、これが資本主義を切り開く力になったということです。以上で取り上げた三つの労働の意味づけにこれは陰に陽にからんでいますけれども、それはまたアダム・スミスのお話をするときに触れることにします。以上の話をバックにして、教材にあげた新書二つですね、大庭さんと今村さんの本を読み直してください。

次回は勉強会の「労働」のテーマの第二として、アダム・スミスの『道徳感情論』を取り上げます。これはセラピーであるとか、感情労働に関連してきますので、少し時間をかけてやりたいと思います。

以上